

明治後期の洋裁書とその周辺

— 明治40年代を中心として —

On Textbooks of Western Clothes in the Latter Years of the Meiji Era

(1993年4月7日受理)

宇野保子

Yasuko Uno

Key words: 洋服受容, 明治後期, 洋裁書

〔緒 言〕

かつて日本が経験した外来文化の流入期の中でも、明治維新のそれは、西欧諸国の文化を一時期に取り入れた事や、政治経済の近代化が風俗や生活文化の西洋化と重なった事などが大きな特徴といえる。筆者は、この時期の服装の改革が日本人の洋装化の起点となり、現代の衣生活につながっている点に興味を覚え、「日本における洋服受容の過程」を一連のテーマとしてきた。この研究過程で、「洋裁書」の存在を知り、これを並行して研究することにより幾許かの相乗効果をあげてきた。すでに明治初年から30年代までの洋裁書についてその内容を明らかにし、当時の洋装を探るいくつかの情報を得てきた。本報は、これに続く時代の洋裁書について、同じ目的を達成しようとするものである。

〔研究 方 法〕

前報までと同様に、「国立国会図書館所蔵明治期刊行書目録」の中から、明治40年代に発刊された洋裁書の内、本報の研究目的

表1 研究文献一覧表

にかなう洋裁書を選び出し、表1に示す12文献を研究対象とした。各文献ごとに、内容、構成を検討し各々の特徴を明らかにした後、この時期全般の洋裁書と洋装の傾向をまとめた。洋裁書の周辺を探る資料としては、「新聞集成明治編年史」「明治ニュース事典」「女学雑誌」等を参考とした。

文献番号	書 名	著 者	発 行 所	発行地	発行年
M4-1	洋式小物雑種裁縫新書	山田東明	文錦堂	東京	明治40
M4-2	洋服裁縫新書	山田東明	文錦堂	東京	明治40
M4-3	洋服裁縫之栞	女子教育会編	小川尚栄堂	東京	明治40
M4-4	洋裁寶典 第一巻	大見文太郎	大日本洋裁普及学会	京都	明治41
M4-5	洋服裁縫の栞	福谷政吉	柏原奎文堂	大阪	明治41
M4-6	洋服裁方獨習圖解新法	洋服裁方研究会編	昇栄堂	東京	明治41
M4-7	最新簡易 洋服番号型裁斷圖解	吉住助太郎	長崎東京屋	長崎	明治41
M4-8	男女兒洋服裁縫書	山田東明	文錦堂	東京	明治41
M4-9	小兒洋服全書	熊田恒造	東京洋裁研究会	東京	明治41
M4-10	小兒服のいろいろ	岩村秀太郎	女学社	東京	明治41
M4-11	ミシン裁縫獨習案内	木村鶴吉	木村鶴吉	岡山	明治41
M4-12	子供西洋服の拵へかた	松江みさ子	服部書店	東京	明治41

〔研究結果および考察〕

明治政府の近代化政策は、衣生活においても洋装化という形になって現われた。すなわち初期の段階では、富国強兵をめざした軍隊の軍服として、あるいは鉄道や郵便の職務に携わる人々の職能服として近代的な機構の中で政策と共に浸透していった。また政府高官や外交官等、欧米を中心とした対外的関係を重んじる人々によっても早い時期から受容されていた。その後、憲法発布、国会開設等着々と進む近代化政策の中で洋服着用者はしだいにその裾野を広げていった。

しかし、女子の洋装は、鹿鳴館時代の極端な欧化政策の反動から遅々として進まず、日清戦争後の国粹主義の影響もあり、すっかり復古調に戻っていた。その後、明治30年頃から内地雑居に関連して女子の服装改革が再考され、歩行や運動の際に裾が乱れ、前が開ける和服の欠点を補うものとして女学生の袴が見直されていた。このような女子の服装改革は、彼女らの意識にも大きな変革をもたらし、女子教育の充実、体育の奨励、職場への進出と新しい動きがみられた。

またこの頃、関税自主権確立の見通しがついた事から、輸入品もしだいに国民生活に浸透していった。洋服裁縫の必需品であるミシンについても、明治34年にはシンガーミシンが輸入され、翌年には東京に支店ができ、さらに日露戦争後の39年には、シンガー裁縫女学院も開校¹⁾されていた。

本報で研究対象とする12文献が発刊されたのは、これに続く時代であった。

I. 洋裁書の周辺

日露戦争後、その勝利によって日本は列強の一員に加わり国民の間には、明治維新以来の国家目標は一応達成された感が広がり、しだいに国家主義に対する疑問が生まれていた。そうした国家主義と個人主義の対立の中で、様々な社会的矛盾と自我の問題に目を向けようとする文学が現われた。明治44年に平塚雷鳥が創刊した「青鞥」もそうした新しい文化を代表するものだった。

また、戦後の経済的不況、貧富の差などの現実的な条件を背景として社会主義の思想を唱える人々もふえ、明治39年には日本社会党が組織²⁾されている。

一方、明治政府が行っていた近代化のための教育政策は、明治19年の学校令で小学校の4年がすでに義務化されていたが、明治40年には6年に延長³⁾されている。この間の女子の就学率の伸びはめざましく、明治19年には男子70%弱、女子30%強であった就学率が、明治40年には、男女ともほぼ95%の同率を示している。日清、日露の2つの対外戦争を経て、資本主義国としての進展と国際的地位の向上が、女子の教育の必要性をもたらしたのであった。かねてから国家隆盛の礎としての中流以下の大衆女子教育の必要性を悟り、帝国婦人会を設立し、その教育部門の事業である実践女学校、女子工芸学校を創立していた下田歌子の考えにも通じるものであった。

当時の女学生の風俗としては、海老茶の袴に矢絣の長袖の着物、流行の203高地の髪⁴⁾に大きなりボンをつけてパラソルをさして革靴をはくスタイル⁵⁾であった。

この時期の洋装は、鹿鳴館時代の政治的要請に基づく一時的流行となったバツルススタイルとは異なった新しいスタイルがみられた。それは30年代からのシンプルなスカートに平らなプリーツか三角布を接ぎ合わせて裾を広げ、高いカラーをつける「ハイカラ」スタイルと、アール・ヌーボーの曲線様式のSカーブスタイル⁶⁾であった。いずれも高価な西欧流行のドレスであり、一部の上流階級の貴婦人に受容されたものであった。

それに対して、当時の男子の洋服の流行を伝える文献は多く、次に示すのもその一例である⁷⁾。

「現今一般の人士が軽便と實利とを感じ來るの結果として洋服の着用者は年と共に増加し五十萬の軍人二百萬の學生を始め、諸官銀行會社等の通勤者より一般の商人職工に至るまで日常の着用者は國內に於て其數無慮五百餘萬人に及ぶ——」

洋服がその実用性の面から軍人、学生、会社員、商工業者等に広く着用されていた事を示すものであり、同書によればこの時勢の必要から、女学校では従来の普通裁縫科にミシン裁縫科が加えられるようになったという、また子供服に関しても山田東明の著書⁸⁾に「近來何れの御家庭を見ましても御子さんの方の中に一人も洋服を召さぬと云ふ家は殆んど無いと申しても宜しい位で御座います」とあり、「小供洋服の裁縫は従来の和服裁縫と同様、今後の家庭に於て主婦となり母となる方々は是非共其の一通を心得て置かなければなりません。」としている。

この時期の洋装は、職業をもった男性にとっては、機能的な職能服として着用という形で、家庭の女性には、男性や子供のための洋服の裁縫という形で受容された時期ということができよう。そうした手引書として発刊された「洋裁書」について次に考察を進めていく。

II. 洋裁書の内容分析

1. 洋服の種類

表2は、各文献に掲載された洋服の種類を数で表わしたものである。この表にしたがって、洋服の種類をみていく。

表2 各文献に掲載された洋服の種類と数

文献番号	紳士服				婦人服		子供服		小物・付属品			シャツ	下着			備考	計
	礼服	背広	外套	その他	洋服	その他	男児	女児	はだけかけ	エプロン	その他		上衣	下衣	その他		
M4-1							11	23	8	9	1	9	0	5	0	広告	66
M4-2	3	4	4	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	広告	15
M4-3	3	2	3	5	1	1	0	0	0	0	0	0	2	3	0		20
M4-4																	0
M4-5	0	0	0	0	1	10		14	3	7	9	27	11	4	2		88
M4-6	1	1	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0		5
M4-7	1	1	3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0		6
M4-8							5	15	0	5	0	5	0	3	0	広告	33
M4-9								22	0	0	0	0	0	0	0		22
M4-10							14	30	0	3	3	0	1	1	0	広告	52
M4-11	0	0	1	2	1	1	1	1	6	0	3	4	0	5	2		26
M4-12								31	0	0	0	0	0	2	0		33
計	39				4	14	166		57			45	41				366

まず、紳士服の礼服には、燕尾服、マントル、モーニング、フロックコートが、背広にはサックコート、独逸マントルが、外套にはオーバーコート、インバネス、ケープ、トンビなどが含まれている。これまでの30年代の紳士服と特に大きく変わるところはみられないが、その他の紳士服として、文献M4-3に狩猟服、軍服、警官服が軽く紹介されている。

次に、婦人服については、文献M4-2, 3, 5, 11に掲載された物はいずれも看護服で、あとは吾妻コートと袴である。その他のM4-5, 11には、海水浴着が含まれている。看護服については、女性の洋服着用者が少なかったこの時期に多くの洋裁書でとりあげているのは、日清日露の両戦争を通じ看護婦の重要性が高まっていた時期⁹⁾であることと、その職務内容から機能的な洋服が求められていたことなどによるものと考えられる。吾妻コートについては、30年代からの引き続きの流行であり、袴は従来の和服の欠点を補う被服として、女学生や女教師にすでに受容されていたという背景がある。

子供服に関しては、男児、女児と分けて記載されたものと、M4-5やM4-9のように男女の別なしで記載されたものがあった。表2では、文献の記載どおりにまとめたが、男女兼用のように書かれているものの多くが、女児服であった。女児服としては、ヨークドレス、ピシヨップス、ガールスタットドレス等と呼ばれるワンピース型のものや、ブラウスとスカートの二部式のものがみられた。男児服としては、水兵服、サックコートなどのスーツ型の洋服と、ブラウス、半ズボン等がみられ、ベサントドレスといわれる男

女兼用のスモックもみられた。

小物、附属品に関しては、その多くがよだれ掛けとエプロンである。その他に含まれて



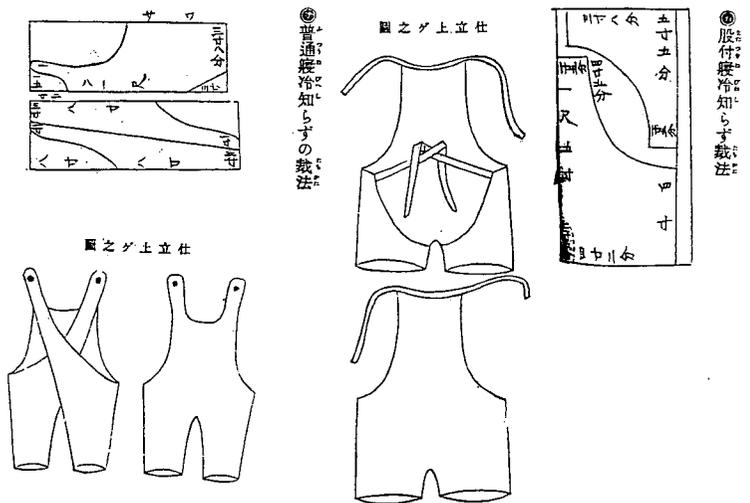
M4-1 洋式小物雑種裁縫新書

図1 和洋兼用シャツ

いるのは、M4-1ではネクタイ、M4-5, 10, 11は共に帽子である。

次にシャツについては、背広の襟飾として着用されたホワイトシャツの他に、図1に示すような脇前襟シャツ、普通脇襟シャツ、普通前釦シャツが紹介されている。いずれも和洋兼用で、脇前襟と普通脇襟は、特に着物の打ち合わせの下からボタンが見えないように配慮されたデザインとなっている。

下着では、メリヤスのシャツやズボン下、猿股の他、女児のペティコートやズロウスなどがみられる。下着のその他に含まれるのは、図2の「寝冷え知らず」である。現在、乳幼児用としてよく着用されているオーバーオールや、サロペットの類である。当時の前がはだけやすい和服の短所を補う幼児服として取り入れられたものと思われる。



M4-11 ミシン裁縫獨習案内

図2 寝冷え知らず

2. 内容構成

前節のような種類の洋服が、どのような内容で説明されているのか、文献全体の内容構成についてまとめていく。表3は、各文献の製作、材料、管理等の内容の記載の有無を調べたものであり、表中の○印は、記載があることを示している。

全体に内容は、

表3 各文献の内容構成

製作に関する事柄が中心であり、特に採寸、裁断、本縫いに重点がおかれている。ここで製作過程での要ともいべき製図の説明が少ない事が指摘されるが、これは、洋裁書の紙面を使つての型紙の通信販売が始まっているためと考えられる。

	スタイル画	尺	体	標準寸法	製 作					材 料				管 理		用 具		備 考	
					採寸	製図	裁断	仮縫	補正	本縫	部分縫	素材	用尺	糸	付属品	洗たく	ブラシ		畳み方
M4-1	○				○	○				○	○			○	○	○	○		
M4-2		○	○		○	○	○	○	○	○	○			○	○		○	○	洋服の種類
M4-3					○	○				○	○						○	○	洋服の種類
M4-4		○			○						○	○	○						
M4-5	○					○				○							○	○	
M4-6			○		○	○	○												
M4-7			○	○							○	○		○					
M4-8	○				○	○				○	○	○							
M4-9	○	○			○	○													
M4-10	○	○			○	○	○			○	○	○	○				○	○	地直し
M4-11						○				○	○								
M4-12	○				○	○	○			○	○		○						型紙のおき方

図3に示すのは、M4-8の巻末に掲載された「雛形販売広告」であるが、下着や子供服、紳士服のそれぞれの型紙の定価が表示され、申込所が明記されている。文献M4-10にも同様の広告がみられ、本誌で紹介された子供服の型紙のデザイン番号と年齢、胸回りを記入する注文書が綴じ込まれている。このような型紙がどの程度利用されていたのか、実物はどのような物であったのか不明な点も多いが、この時期、洋服の家庭裁縫のための型紙が販売された事は、画期的なことである。

次に材料については、紳士服の素材として、羅紗、スコッチ、メルトン、セルアルパカ、カシミヤなどが、裏地としてはスレーキ、絹子、甲斐絹等が示されている。また、下着にはネル、フランネル、木綿が、よだれ掛けや前掛には白天竺、白キャラコ、洋布ローンなどの材料が適当と説明されている。この他それぞれの洋服ごとの用尺が尺寸の単位で記されている。糸については、カタン糸は綿服や洗たくできるものに用い、絹糸は羅紗及び絹布の類に用いるようにとの記述もみられる。また、羽二重、穴糸、地縫糸についてその用途が示され、ツ

申 込 所
大 販 買 所
文 錦 堂

販 買 元
山 田 東 明

東京市品川区北品川町五丁目六番地
東京市品川区北品川町五丁目六番地

東京市品川区北品川町五丁目六番地

(十一) 男子用全紙
雛形五種 全紙七枚 全紙八枚
(十二) 新式全紙
雛形五種 全紙七枚 全紙八枚
右全部型紙の方へは送料は別として郵付仕舞

雛形販売廣告
(一) 婦人用全紙
全紙七枚 全紙八枚
(二) 女子用全紙
全紙七枚 全紙八枚
(三) 男子用全紙
全紙七枚 全紙八枚
(四) 女児服
全紙六枚 全紙七枚
(五) 男児服
全紙六枚 全紙七枚
(六) 洋装用全紙
全紙七枚 全紙八枚
(七) フロックス
全紙三枚 全紙四枚
(八) オーバーコート
全紙四枚 全紙五枚
(九) 羽二重
全紙四枚 全紙五枚
(十) インパルス
全紙四枚 全紙五枚

M4-8 男女児洋服裁縫書
図3 雛形販売広告

レーテとよばれる麻製の糸も毛織物のボタン付用の糸として紹介されている。

衣服管理に関しては、洋服の畳み方、ブラシかけ、毛織物の洗たく法や、「西洋洗たく」と呼ばれる糊付の方法。ペンキ、油、インク、果汁のしみ抜きの方法等が記されている。このような洋服の保存、取扱いに関する事柄は、これまでの30年代の洋裁書には見られなかったものであり、ここでも洋服がしだいに実際の衣生活の中に浸透していった様子をうかがい知ることができる。

用具については、ミシンの使用法と種類が示されているが、それによれば手廻しミシン、足踏ミシンそして手廻し足踏兼用ミシンがあったという。文献中には明記されていないが、明治35年から輸入され40年には裁縫女学院を開いたシンガー製のものと考えられる。その他の用具としては、火熨斗、ブラシ穴抜きのみ、鳩目打、洋鋏、小鋏、雛尺、鯨尺、三角定規、米利堅針、型紙、チャコ等ほとんどの洋裁用具がそろっており、家庭裁縫としての洋裁の知識の普及を物語っている。

「体型」については、M4-2、-6、-7の文献で取り扱っているが、いずれも成人男子の様々な体型を紹介し、その体型に適合する洋服づくりの際の留意点、標準の型紙からの補正の仕方について述べたものである。

「標準寸法」については、M4-7で1歳から22歳までと23歳以上の男子についての5項目の標準寸法が、M4-9では、1歳から16歳までの子供の8項目の標準寸法が示されているが、採寸の場所や方法、統計のとり方などが記載されていない曖昧なものである。M4-10では、日本健体小児の発育論63号から転載された男女別の標準寸法が示されている。

以上のように、この時期の洋裁書は婦人服が少ないものの、洋服の種類も豊富で内容も製作だけでなくどまらず、材料、管理、用具、採寸等多岐にわたって充実し、洋服裁縫に必要な情報量を十分に満たしたものと見える。

3. 製図法

ここでは、洋裁のポイントとなる製図法の視点から、それぞれの文献について検討した。

紳士服については、インチによる割り出し式がすでに30年代から一般化していたが、次節に示す表4でも明らかのように、40年代にはこの方法が、定着してきたようである。

子供服や小物では、鯨尺による囲み式、鯨尺による寸法断ち、インチによる割り出し式と三種類の方法がみられたが、取り扱った洋服の数は、鯨尺による囲み式が最も多かった。たとえば、図4に示す文献M4-11の小児蝶の前掛がそれである。これは布地に直接印をつけて裁断する和裁の方法なので親しみやすく、また図のような細かな始末の仕方までいねいに図解してあるので、独習書として多に活用されたものと思われる。

このように紳士物とは異なり、子供物の場合は、従来の和裁の知識の応用が可能な囲み式製図が主流であったが、例外として、文献M4-10のようなインチによる割り出し



M4-5 洋服裁縫の菜
図4 小児蝶前掛

式の製図がみられた。それが図5, 6である。現在の原型とほぼ同じ考え方で引かれており, 図5はトルソーローパー型のもので, 図6は袖も含む胸部原型となっている。これについては文献中, 「製図とは各児身体の寸法の一部を基礎として全體の形を割り出す方法でございます。一略一 一々基礎から割り出すという事は, 御用の多い御家庭では, 到底六ヶ敷

事でありませう。其故此等様々の形を直ちに應用する事が出来るようにと存じて, 本書には各年齢によって夫々の形を記して置きました。」とあるように, 本来は割り出し式の製図であったものを著者が, 読者の便宜をはかり, 各年齢ごとの標準寸法をもとに囲み式の製図におき変えたものであることがよくわかる。

4. まとめ

まとめとして, 40年代の洋裁書を30年代までの洋裁書と比較検討することによりその特徴を明らかにしていく。表

4は, 各文献ごとに取りあげられた洋服の種類と製図法をまとめ, 全体の内容から筆者が, その文献の対象者と性格を推定したものである。以下, この表に従い考察を進める。

まず, この時期の洋裁書全般の傾向として, 20年代30年代にみられた体型の異なる西洋人の洋裁書をそのまま翻訳したものや, 洋服を知識として広める啓蒙書の類はみられなくなり, 製作のガイドとなる実用書に限られてきている。

また取り扱う服種ごとに, 紳士服, 子供服, 洋式小物と裁縫書が専門分化して, それぞれが独立して発刊されている。

製図法に関しても, 紳士服にはイン

チによる割り出し式の製図法が, 子供服や洋式小物には鯨尺による囲み式, 一部鯨尺による寸法断ちという使い分けがなされるようになっている。これは, 立体構成の理論に基づく複雑な製図を用いる紳士

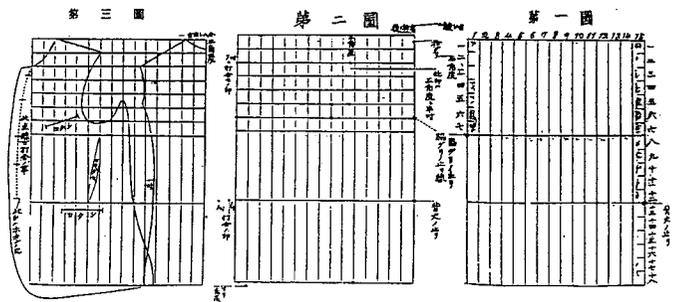


図5 襟回りをもとにした製図

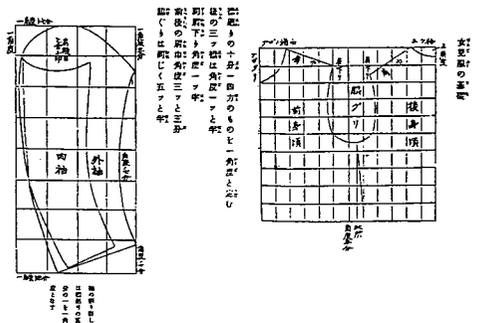


図6 女児服の基礎

表4 明治40年代の洋裁書のまとめ

文献	服種	製図法	対象	性格
M4-2	紳士服	インチ 割り出し式	一般・職業人	実用書
M4-3	紳士服		一般	教養書
M4-6	紳士服	インチ 割り出し式	一般・職業人	実用書
M4-7	紳士服		一般	情報誌
M4-1	子供服 小物		一般	実用書 (教養書)
M4-5	子供服 小物	鯨尺 囲み式	一般 女学生	実用書 独習書
M4-11	子供服 小物	鯨尺 寸法断ち (一部型紙)	一般	実用書
M4-4	(基礎縫)		一般	実用書
M4-8	子供服		一般	実用書 (教養書)
M4-9	子供服		一般	情報誌
M4-10	子供服	インチ 割り出し式	一般・職業人	実用書
M4-12	子供服	鯨尺 囲み式 (インチ 割り出し式)	一般	実用書

服には、西欧の伝統を受け継ぐ翻訳書どおりの製図法が最も適当であり、比較的単純な小物や仕立てばえをそれほど問題にしない子供服には、従来の和裁の経験を生かした平面構成の応用的な技法で充分であったためと考えられる。

次に婦人の洋服については、40年代の洋裁書にも相変わらず記載が少なく、わずかに看護服がみられただけで、あとは吾妻コートと袴くらいであり旧態依然としていた。これは、婦人の洋服着用者がほとんどみられなかった当時の社会を反映したものと考えられる。また、当時のヨーロッパの女性の服装はバサルススタイルからSカーブスタイルへ移行していた時期であり、この時期の女子洋装そのものが平面製図に表現しにくい構成であったためとも考えられる。

またこの時期の洋裁書に取りあげられた服種としては、子供服や小物が多く、これらについては、製作過程についても詳しく説明されている。シャツや下着、エプロン、よだれかけ等の小物は、従来の和服一辺倒の衣生活に機能性の面から貢献するところが大きかったため、この時期に多く受容されていたと考えられる。

そしてこの時期に型紙の通信販売が始まった事も特筆すべき事である。このことにより型紙を製作する経験のない和服裁縫に慣れた家庭婦人にとっても、洋服裁縫が一步身近なものになったと考えられる。

以上のように40年代の洋裁書から、当時ある程度の普及をみた男子洋装と、遅々として進まない女子洋装の中で、便利な洋装小物を盛んに受容して、それを和服に同化していった明治後期の活発な衣生活の一端を知ることができた。

[要 約]

明治40年代は日清日露の対外戦争を経て、国力の充実と国際的地位の向上を得た時期であった。それと共に男子の洋装は、その着用者が増加の一途をたどったのに対し、女子の洋装化は遅々として進まなかった。この事は、洋裁書にも表われ、服種や製作方法共に充実した紳士服に対して、婦人服の記載はほとんどみられなかった。しかし、便利なシャツや下着類、子供服などは多く取りあげられ、実際の衣生活に受容されていたようである。そのため、この時期の洋服は、男子にとっては着用という形で、女子にとっては裁縫という形で受容されたといえる。

この時期の洋裁書の特色は、製図法がしだいに整えられ、インチによる割り出し式と鯨尺による囲み式が使い分けられるようになった事、実生活に取り入れやすく製作に理論や技術を多く必要としない洋装小物などが多くなった事、内容が製作のみにとどまらず総合的な内容になった事、型紙の通信販売の広告を掲載したものもみられるようになった事などである。

[引用文献等]

- 1) 新聞集成明治編年史 財政経済学会 13巻 読売新聞 明治39年10月22日
- 2) 日本思想史概論 石田一良 吉川弘文館
- 3) 明治以降教育制度発達史 文部省教育史編纂会 39年10月
- 4) 新聞集成明治編年史 財政経済学会 13巻 東京日日新聞 明治39年6月4日
- 5) 新聞集成明治編年史 財政経済学会 13巻 報知新聞 明治40年1月19日
- 6) 明治ニュース事典 毎日コミュニケーションズ 7巻 国民新聞 明治36年12月15日

明治後期の洋裁書とその周辺

7) 子供西洋服の拵へかた 松江みさ子 服部書店 明治41年

8) 洋式小物雑種裁縫新書 山田東明 文錦堂 明治40年

9) 1億人の昭和史 毎日新聞社 昭和56年

「日清戦争勃発により、日赤や同志社などから600人の看護婦が従軍した。」「明治33年の北清事変から海上勤務も始まった。病院船の博愛丸や弘済丸などに約700人の看護婦が乗り組み傷病兵の後送看護に当った。」との記述がある。